2022年6月5日 川越教会

丸山　勉

とりなしびと

［使徒言行録28章17～31節]

三日の後、パウロはおもだったユダヤ人たちを招いた。彼らが集まって来たとき、こう言った。「兄弟たち、わたしは、民に対しても先祖の慣習に対しても、背くようなことは何一つしていないのに、エルサレムで囚人としてローマ人の手に引き渡されてしまいました。ローマ人はわたしを取り調べたのですが、死刑に相当する理由が何も無かったので、釈放しようと思ったのです。しかし、ユダヤ人たちが反対したので、わたしは皇帝に上訴せざるをえませんでした。これは、決して同胞を告発するためではありません。だからこそ、お会いして話し合いたいと、あなたがたにお願いしたのです。イスラエルが希望していることのために、わたしはこのように鎖でつながれているのです。」すると、ユダヤ人たちが言った。「私どもは、あなたのことについてユダヤから何の書面も受け取ってはおりませんし、また、ここに来た兄弟のだれ一人として、あなたについて何か悪いことを報告したことも、話したこともありませんでした。あなたの考えておられることを、直接お聞きしたい。この分派については、至るところで反対があることを耳にしているのです。」そこで、ユダヤ人たちは日を決めて、大勢でパウロの宿舎にやって来た。パウロは、朝から晩まで説明を続けた。神の国について力強く証しし、モーセの律法や預言者の書を引用して、イエスについて説得しようとしたのである。ある者はパウロの言うことを受け入れたが、他の者は信じようとはしなかった。彼らが互いに意見が一致しないまま、立ち去ろうとしたとき、パウロはひと言次のように言った。「聖霊は、預言者イザヤを通して、実に正しくあなたがたの先祖に、語られました。

『この民のところへ行って言え。あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない。』だから、このことを知っていただきたい。この神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです。」 パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。

[１]　信仰生活と「喜び」

私はもう62才になるのですけれども、バプテスマを受けたのはもうじき20歳になろうとする19歳の時でした。19歳になったばかりの時までは、自分が牧師となるなどと言うことはおろか、毎週礼拝に通うような生活が自分の中に始まるなどと全く思ってもいませんでした。皆さんも、過去の自分のことを思うと、今教会生活を大切にしている自分というのは想像もしていなかったという方は少なくないかもしれませんね。このように、日曜日ごとに礼拝に出席するという人々は、全体の人口から考えると本当に少ない“貴重な人々”だと言っても良いのかもしれません。けれども、自分が何か決死の思いでそのような生活を死守しているのかというと、どうなのでしょう？そんなに力こぶを入れて信仰生活を送っているというより、もっと自然体で礼拝に参加しているのではないでしょうか？そして、それはとても大事なことのように思うのです。もう自分の「生活」となっている、つまり「生き方」として当然になっている、ということですから。そして、これは大事なことだと思うのですけれども、心に「喜び」がないと、キリスト教信仰、また教会生活は続けられないのではないかと思います。

[２] 「自己絶対化」「自己正当化」からの自由

私たちはずっと、「使徒言行録」から使徒パウロの生き方というものを見て参りました。今日はその使徒言行録の最後の部分です。

私たちは、パウロという人はとても伝道熱心で、ちょっと普通の人とは違うと思いがちではないかと思うのです。そして今日の所には書いてありませんが、彼は、最期はローマで殉教したと伝えられています。あの皇帝ネロの時代、西暦60年代の半ばに、言ってみれば権威に盾突く危険人物とみなされ、他のクリスチャンたちもですが殺されてその生涯が終わった訳です。このようなことを聞くと、酷い時代だなと思う方もおられると思いますし、或いは「信仰というものはほどほどが良いのではないか」と思ってしまうこともあるかも知れません。…しかしどうなのでしょう。私は思うのですが、イエス・キリストを信じる信仰というものは、ほどほど・あってもなくてもどちらでも良いようなものなのでしょうか？もし信仰が、そしてイエス・キリストがアクセサリーであるのなら、そうかも知れません。アクセサリーはなくても生きて行けます。しかし、私たちにとって、あなたにとって、奇しくもパウロが「私にとって生きることはキリストだ」（フィリピ1:21）と言ったように、キリスト信仰が本当に「私を生かすもの・支えるもの」であるのなら、「どっちでもいいよ」とはやはり言えないのではないかと思います。

今日の箇所で、パウロは囚人としてローマに運ばれてきています。彼はユダヤ人・ユダヤ教徒たちから「裏切り者」とみなされ、殺されかけたのですね。そこで当時ユダヤを治めていたローマ総督に、自分の裁判はローマ皇帝の下でしてほしいと上訴し、舟に乗せられ、遂にローマにやって来たのです。パウロは「ローマの信徒への手紙」15章で、「あなたがたの所に行きたいと切望している」と書いていたローマです。既にローマには異邦人たちの信徒の群れ・教会が出来ていました。パウロがローマに着くや否やその教会の者たちが彼を喜んで迎えてくれたと15節に書いています。神様は不思議な方です。パウロのローマ訪問の願いは、囚われの身となることによって実現したのですね。パウロは、良く「異邦人伝道のために召された伝道者」と言われます。確かにそうです。しかし、今日のこの使徒言行録の最後の章で分かることは、彼がどれほど同胞のユダヤ人たちのことを心にかけているか、ということです。17節には「三日の後、パウロはおもだったユダヤ人たちを招いた。彼らが集まって来たとき、こう言った」とあります。ローマにもパウロと同じユダヤ人たちは多くいた訳です。

また23～24節にはこうあります。「そこで、ユダヤ人たちは日を決めて、大勢でパウロの宿舎にやって来た。パウロは、朝から晩まで説明を続けた。神の国について力強く証しし、モーセの律法や預言者の書を引用して、イエスについて説得しようとしたのである」。彼は囚人と言えどもローマの市民権も持ち、割と自由が与えられ活動も出来たようです。ですから「朝から晩まで」「神の国について力強く証しし」「イエスについて説得しようとした」と。「説得」というのはあまり伝道らしくない表現にも思いますが、彼のほとばしり出るものを感じますね。いや、そういうのがないと伝道にはならないですよね。“私はこれによって人生が変わったんのだ。あなたにも伝えたいのだ”というもの。また19～20節では、‟私は同じユダヤ人たちから目の敵にされたけれども、同胞を告発することではなく、むしろ私はあなた方イスラエルの者たちの希望のために鎖に繋がれているのですよ”ということを語っています。これは祈りに裏付けられた深い言葉ではないでしょうか。パウロと言う人の存在根拠だと言って良いと私は思います。

その後の24節には「ある者はパウロの言うことを受け入れたが、他の者は信じようとはしなかった」とあります。パウロ自身は「説得」と言っても折伏させるなどということは考えていません。あとのことは「聖霊」に委ねています。信仰を与えられるのは神様なのですから。彼は同じユダヤ人のことをいつも痛みに思っていました（ローマ書9章参照）。彼は恐らく「私自身、あなたがたと同じだったのですよ。イエスという男は、ユダヤ教の破壊者だと思っていた。しかし私は彼と出会って自分の傲慢が示された。私は己を神として、他者を切り捨てていた。神を敵としていたこの私のために、イエスは十字架で「彼を赦し給え」ととりなし祈ってくれたのだ。彼こそが、実は、全ての者のために遣わされた神の御子でいらっしゃるのだ。この方が、遥か旧約聖書も指し示していた、イスラエルの真の希望なのだ」と大胆に語っていたに違いないと思います。

今のパウロの信仰というのは「信心の強さ」ではありません。かつての彼はその「信心の強さ」で、クリスチャンたちを迫害していたのです。「自己絶対化」「自己正当化」です。これは常に私たちの中にあると思います。「戦争」というのもここから起こりますね。そしてそれを正当化する。…クリスチャンというのは、私を一方的に愛し、赦して下さるイエス様が心の中に住んで下さることによって、その「自己正当化」から自由にされた人なのです。

[３] 共に福音にあずかるように召され

この間テレビで、今年はあの「あさま山荘事件」から50年ということで、自分もまたあさま山荘にこそいなかったけれど、当時の「連合赤軍」に加わっていて、後に服役をして現在72歳になっている岩田平治さんという人が紹介されている番組がありました。平田さんは、当時高い理想を掲げて、世の中を変革しなければならない、そのために武装闘争もやむなし、と思っていたけれども、ある時、叔父さんから「あなたは、誰か身近な人の一人でも幸せにしたか」と問われて、それで自分の愚かさに気付かされたのですと語っていました。私はそれを聞いて、あぁ、パウロも同じだったのではないかなと思いました。そして、私たちはどうだろうと思いました。私たちが信じているのは「宗教」や「思想」ではないのですね。私たちは、「福音・良き知らせ」に捕らえられているから、その幸い・幸せに、一人でも多くの方と共に与りたいのです。そのために「教会」も建てられているのです。

私たちは福音を押し売りするようなことではなく、私たちがなすべき伝道は、本当に「祈る」ことだと思います。まず主イエス様が私たちのために祈って下さいましたよね。パウロも、自分に対する神様の心・イエス様の心が分かって、異邦人のためだけでない、同胞のユダヤ人たちのためには、本当に心砕いて、執り成し祈った、そのような人生であったと思います。使徒言行録の静かな締めくくりはそのことを教えてくれているように思えます。とりなし人（びと）になる！神様がこの私にも、主の深い愛を示して下さったように、具体的な一人ひとりのために、あなたがこの福音の幸いを示して下さい！と祈ること、それだけが私たちに出来ることだし、求められていることだと思うのです。私たちは、「共に福音にあずかる」ようにと神様に召されているのだと思います。聖霊の確かな導きに信頼してゆきましょう。「死」を超えても決して朽ちることのない希望は、主ご自身の中にあります。お祈り致します。

愛する主よ、今日の聖霊降臨日の礼拝をありがとうございます。あなたの愛が私たちを取り囲んでいます。ですから私たちも祈りを持って、あなたのお働きに参加させて下さいように、聖霊なる神よ、導いて下さい。私たちの究極の希望・喜びは、ただあなたのもとにあります。これからの「主の晩餐式」を通してもそれを示して下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。